

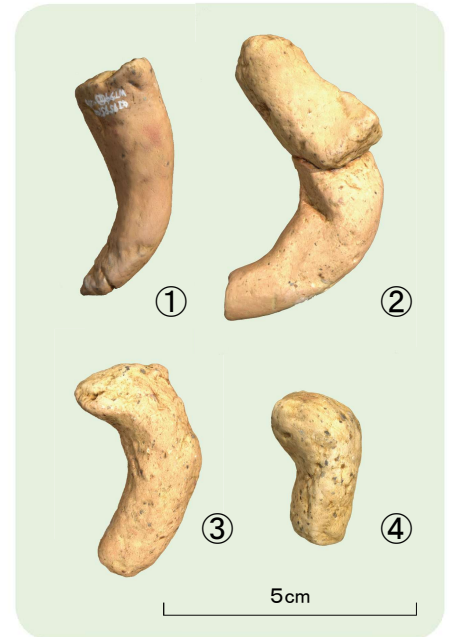
ぎょうしゃづかこふん

行者塚古墳の西造り出しからは、かわいらしい手づくねの土製品が見つかっています。わかりやすいものでは、魚、鳥、木の実といった海山の幸や、餅などの食べ物の確認されています。

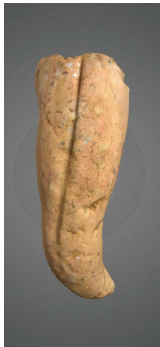
この造り出しからは、^{いえがたはにわ}家形埴輪や^{は し き}土師器なども出土しています。土師器はどれもミニチュアサイズで、^{たかつき}壺や^{ざる}高杯、^{まづ}筴形の土器などがあります。発掘調査では、食物形の土製品は土師器の器に載せられて家形埴輪の前に置かれていました。西造り出しでは、神殿のような建物に食物を捧げるお祀りの場面が再現されていたと思われます。

古墳時代の食べ物を想像させてくれる土製品ですが、何をモチーフにしているのか分からないものも存在します。

右の4点は、^{かぎばり}鉤針のように曲がった形をしているため「鉤形土製品」と呼ばれています。割れている部分が多く、何かの一部分のように見えますが、何を表しているのでしょうか？



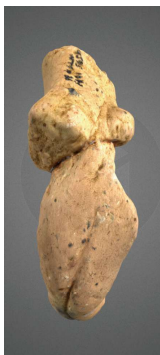
ここに注目！



①の背面、カーブが膨らんでいる方です。縦に1本の線が刻まれています。
ほかの3点にも同じ場所に線の表現があります。



①の正面です。
下側の先端は^{つの}角のように細くとがっています。上端は割れています。
③の先端は①よりも丸い形をしています。



②の背面です。
上部に別のパーツが繋がっていた痕跡が残っています。
ほかの鉤形土製品が付けられていたのでしょうか？

鉤形土製品は、本来これらのパーツが複数本まとまって1つのものになっていたと考えられています。全体像は復元できませんが、タコやイカのような海の生物ではないかという説もあります。



※想像図です